

令和2年度第2回高砂市総合教育会議 会議録

令和3年2月4日（木）高砂市総合教育会議を高砂市役所分庁舎1階大会議室1において開会

出席委員

市長	都倉	達殊
教育長	衣笠	好一
委員	山名	克典
委員	吉田	美香
委員	神尾	信作
委員	布施	隆志

出席事務局職員

企画総務部長	永井	幹雄
企画総務部参事	麻	敏浩
企画総務部総務室長	荻野	章広
企画総務部経営企画室公共施設等総合管理計画担当参事	松本	匡茂
企画総務部経営企画室公共施設等総合管理計画担当主幹	古賀	裕規
企画総務部総務室総務課長	樽家	正治

教育部長	永安	正彦
教育部教育推進室長	阿部	伸也
教育部学校教育室長	赤松	祐人
教育部教育推進室教育総務課長	北野	昌代
教育部教育推進室生涯学習課長	中野	照久
教育部学校教育室学校教育課長	矢野	仁之
教育部学校教育室学校教育課情報教育推進・地域とともにある学校づくり担当主幹	横山	善彦

傍聴者

6名

本日の議事

- (1) 令和3年度教育予算について
- (2) 高砂市公共施設全体最適化計画（素案）について
- (3) その他

○事務局

それでは定刻より少し早いですが、これより令和2年度第2回高砂市総合教育会議を開会いたします。

まず最初に、市長から御挨拶をお願いいたします。

○都倉達殊市長

失礼いたします。

本日は大変お忙しい中、令和2年度の第2回高砂市総合教育会議に出席いただきまして、誠にありがとうございます。

平素から教育委員の皆様方におかれましては、本当に高砂市の教育行政、あるいは高砂市の子供の健やかな成長に御尽力を賜っておりまして、誠にありがとうございます。この場を借りまして厚く御礼を申し上げたいと思います。

さて、私も1回目、8月に開催をされた教育会議が初めてでございまして、今回2回目ということになります。私もこの教育会議につきましては、市長と教育委員の皆様とがこの場で教育行政について真剣に議論をするというという認識を持っております。今後とも高砂市の教育施策の方向性をともに共有をさせていただきながら、子供たちのやはり育むような教育を進めていくということにおきまして、貴重な御意見を賜りながら進めていきたいと考えております。

本日は議題が二つございます。令和3年度の教育予算につきまして、もう一つは現在策定中の高砂市公共施設全体最適化計画の素案についてということで、御説明をさせていただきまして、御意見を賜りたいと思っております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

○事務局

ありがとうございました。

本日は全ての構成委員の皆様にご出席いただきありがとうございます。出席者の御紹介につきましては、出席者名簿をもって代えさせていただきます。

それでは、これから議事に入らせていただきます。

本日は、令和3年度教育予算について及び高砂市公共施設全体最適化計画（素案）についてを議題として上げさせていただきます。

高砂市総合教育会議運営要領第4条の規定により、市長が議事進行を行うことになっておりますので、よろしくお願い申し上げます。

○都倉達殊市長

それでは、議事進行を進めてまいりたいと思います。

まず、議題1でございます。

令和3年度教育予算につきましてを議題といたします。

資料の説明をお願いいたします。

○永安正彦教育部長

教育部長でございます。

それでは、資料の説明をさせていただきます。

資料1ページをお願いいたします。

これは高砂市の教育大綱から抜粋したものでございます。その中で教育施策の重点テーマとして三つのテーマを挙げております。1つ目としまして、自立的に自己の未来を切り拓く力を育てる学校教育の推進、2つ目として、学びと成長を支える学校・家庭・

地域が連携・協力した教育を推進、3つ目としましては、豊かな学びを提供し、未来につなぐ生涯学習の推進でございます。この三つの重点テーマごとに、まとめて令和3年度の予算をお示ししたものが2ページ、3ページでございます。なお、この予算につきましては、市長査定を受けたものを100万円単位でまとめさせていただいております概算でございますので、この数字がそのまま予算書として計上されるものではないということを御理解ください。

それでは、説明させていただきます。

この教育関係予算でございますけれども、これにつきましては毎年教育委員会から市長に対しまして予算要望を行っております。令和3年度予算につきましては、去る11月26日に実施をしたところでございます。そこで、重点項目として要望しておりました七つの項目について主に説明をさせていただきます。

まず、1点目として挙げておりました特別支援教育に係る支援員の充実でございますけれども、これにつきましては、2ページの大きな1番の下から4行目、特別支援教育推進事業、この中に予算として計上をされておるところでございます。

2番目の学校における感染症対策の充実、これにつきましては大きな2番の上から2つ目、小中学校運営管理事業・就学事務事業、この予算の中に計上をされております。

3番目としまして、情報教育推進事業の拡充ということもお願いしておりましたが、これにつきましては、大きな1番の上から3行目、情報教育管理事業、この中に含まれておるところでございます。

4番目の学校施設の補修工事、これにつきましては、大きな2番の2ページの下から4行目、学校施設建設事業として計上をさせていただきます。5番目の文化財施設運営管理事業、これにつきましては3ページの下から2行目、文化財保護・史跡保存整備関連事業の中に含まれております。

6番目の図書館総合システム事業の更新拡充、これにつきましては、3ページの一番上、1行目、図書館運営管理事業として計上をされております。

7番目の史跡石の宝殿及び竜山石採石遺跡整備事業の推進につきましては、先ほどの5番と同じく3ページの下から2行目、文化財保護・史跡保存整備関連事業という中で計上されております。

このときに、要望させていただきました項目につきましては、当初予算に反映をされているというところでございます。

簡単ですが、説明は以上です。

○都倉達殊市長

ありがとうございました。

それでは、委員の皆様方のほうから何か御質問がございましたらよろしくお願ひします。

○山名克典教育委員

いろいろこの予算につきまして、要望書ごとにいろいろつけていただいてありがとうございます。実際にはこの予算つけていただいた分に関して教育委員会からの要望もあるのですが、特にこの予算に対して要望とは別に、市長そのものがこの1年間この4月からやられて、去年の4月からなられて、市のね、いわゆる教育に関して実際、市長がどんなふうを考えているかというのは本当やっぱり率直な意見をお聞きしたくて、結局、市長そのものは以前から青少年ロータリーなんかではいわゆるLDとかそういうのに関してはタケダさんとか呼んでいただいて、いろいろやられているんですけど、実際LDに関しては実際難しいところがあって、なかなか見つかりにくいと、小学校の入

学のとしまでに本当はきちっと例えば見つけてあげて、手を施して対応していったらあげればそれなりの書くこと、読むこと、あるいは理解していくこと、空想で書く捉え方とかいろいろなことに関してはやっぱり対応してあげると早くできるんですけど、そういうのが入ったときにはなかなか分からなくて、どうしても2年生、3年生、3年生ぐらいになってしまうとやっぱりどうしても対応の仕方としては遅れてしまうと、その子はやっぱりどうしてもできがたい子、なかなかついてこれない子だという、それも含めてLDもそうですし、ほかの障害がある子についても結局早期に発見して早期に治療していったらなきゃならないと、そういうのをきちんとしてあげていくと、その子らは、ある部分、特にLDやったらその部分に関して遅れている、その他のことに関してすごく発達状態そのものはいいいという、一つ何かやっぱり気になることがある、そのようなことを1個1個それぞれ個人個人に関して特性のある、その子の特徴として捉えてあげて、障害といえば障害ですけども、そういうのをきちんとして発見してあげて、それに、要はその中で普通の中でみんなと同じようにしていくためのサポートしてあげていく、それで結局その子らの能力、知的レベルそのものを上げていこうという、そういう教育をするためにはやっぱり、先ほどの予算としてもスクールアシスタントとか、あるいは介助員とか、そういうのも当然必要ですし、実際今問題になっている文部科学省も言い出したように、少人数の教室つくってあげていかないと、先生方も昔、五十何人とかいう先生、昔は僕らのときは1クラス50人ぐらいいましたけど、今は本当にいろんな多様性のももの見つけていってあげて、結局早期に対応するためにやっぱり30人クラスみたいなものも必要だろうと思うし、結局それの、そういう少人数クラスをつくって教育していこうという形と、早期に見つけて補助する、障害支援に対するサポートしていける、いわゆるノーマライゼーションとしてユニバーサルなスタイルもそういうのも含めて、教育を高砂市内のその子ら全てに関しての教育を市長がどんなふうな形で考えて、どんなふうなビジョンを持ってやられていこうとしているのか、今までの都倉さんのそれなりの生きざま見させていただいたら、やはり十分それなりの理解をされておるんやけど、そういうのもっとアピールしていただいて、高砂の教育の中で子供にとって非常に、ほかの学校の設備そのものもそうですけども、ICTもそうですけども、結局設備、環境整備を整えば整っただけ、それでやはりその子らに対する対応もできるし、普通の子に関してもいろいろな能力伸ばす、個々の対応に対して結局能力伸ばせるような授業のあり方があって、結局高砂市内のレベルアップにつながるだろうと。これらに関してのアピール、やっぱり高砂はそういうこと、いろんな範囲、いろんなことを含めて、いわゆる項目、教育に関しての概念、それなりの障害のあるものから、それなりの能力長けている子に関しての、いろんなその子によった特性のある教育を全てがやっっていこうという意欲をね、アピールしていただいて、高砂ではすごく教育に非常に個性のある教育をやっっていっているとか、それに対して十分な援助体制、支援体制できているような形、そういうのをやっぱりアピールしていただきたいなと思うので、大ざっぱに、今、言い出したら切りないんですけど、それぐらいの思い入れをお聞きしたいなと思うんですけど。

○都倉達殊市長

最初から大変重たい課題。

今、山名委員のほうからお話がありましたようにまず私が高砂青少年ロータリークラブに所属していたときに、LDに関してタケダ先生のことにつきまして、この市の教育委員会のほうにお話もさせていただいて、ここ数年来続いております。LDにおきましてもタケダ先生県内全域、いろんなところで御講演もされて、またこのうちの市の教育委員会の方々、また保護者の方々におかれましても、最初はなかなか話が前へ行かなかったときもありましたけど、今に至っては本当に熱心に先生のお話も聞きながら教育現

場のほうでも活用していただいております。そういった面もやはりこれからは進めていく必要があると考えておまして、また、この3月定例議会にも聴覚障害のある子供さんが小学校のほうへ入られるということに対しまして、市としても全面的に協力していきたいということで考えております。また、やはり聴覚障害だけではなく、いろんな子供さんを。視覚でした、ごめんなさい、視覚障害でした、訂正いたします。そういうようなところに対しまして市としても対応していきたいと考えております。

それと、やはり学校教育の中において高砂市として私は特色ある授業といいますか、先般伊保小学校におきましてトヨタさんが来られまして、水素の関係の授業をしていただきました。この臨海部にも大手企業があるわけでありまして、昨日もサントリー食品インターナショナル株式会社のボトルtoボトルリサイクルということで、そういった環境面に関しまして取り組んでいる企業、カネカさんであるとか、そういった企業の方々がどのような今、問題意識を持って企業を成長させていくかというところで、やはり出前授業をサントリーさん、カネカさんもやっていきたいという考えはお持ちでございます。そういったやはり、地域にはそういう企業の方々がおられるという中で、やはり小学校、中学校、どこの学年でということは教育委員会のほうでまたお考えをいただきたいと思っておりますけど、そういった学校教育とはまた違った面の授業を取り入れながら子供たちの意識改革といいますか、新たな、将来に向けてやはり考えていただく機会が必要かなと思っております。中学校2年生におきましては、阪神・淡路大震災以降、トライやるウィークによりまして、いろんな業種のところで子供たちが、生徒さんたちが勉強されておられます。それはある意味体験という形での学習になっておりますけど、いろんなこれからタブレットを使ってプログラミング教育も始まろうとしております。そういったタブレットによる、これからICTの関係におきまして、全国的にGIGAスクール構想によりまして進んでいくわけですけど、まさしく私らが学んでいた時代とは違うような授業のやり方によって変わっていくわけでありまして、そういった意味で高砂市におきまして他市に負けないような教育をやはり教育委員会のほうで考えていただきながら進めていっていただきたいと思っております。

それと、明石市の例を出しますと、明石のほうで明石北高校があります。明石北高校の近くに小中一貫教育をやっている学校もありまして、そこではやはり明石北高の理数系ですね、授業との連携、そういったことによって中学生の生徒さんたちがまた違った体験をそこで、学びの体験ですね、やはり高校生とのコラボレーションといいますか、そういったことによっての学力向上というものもされているように聞いております。

高砂の場合に、じゃ、どういった高校生との接点を見出させるのかというのがあるわけですが、教育長さんからもお話を聞いているのが、高砂南高等学校はこのたびこのコロナによって高砂中学校のほうで少しそういうような機会を設けられたと聞いております。小中一貫教育の中でできること、それと高校生との接点をどこかでそういう形がつくっていけないのかなということと、さっき申し上げましたような企業との出前授業を通じての学ぶ機会、そういったことを進めていけたらなと考えておるところでございます。

私のほうからは以上です。

○布施隆志教育委員

今の関連なんですけども、市長さんが民間から来られたということで、民間からの視点ですね、というのがやはり斬新なアイデアというか、斬新な意見が述べられることができるかと思っておまして、今の教育行政というのは長いこと同じ体制でずっと来てて、一般企業が行っている手法とかそういうのを取り入れているのは非常に遅れていると思っております。例えば可視化というところにおいても以前だったらほとんど情報が入ら

ない、我々にとっても入らないという状況から、少しそれを可視化して行って、やっと今何とか見れるようになってきて、今度は可視化から見える化っていう状況に持っていくべきだと思うんですね。大体一般企業だったら、まず可視化が始まって、それからマニュアル化、見える化どんどんして行って、それで結果をいかにフィードバックさせる、PDCAに回すかという手法を持って行って改善していく、要は数値化ってというのは非常に大事だというのが皆さん共通の、一般社会で共通の意見だと思うんですけど、その辺をもっともっと取り入れていくと、そうすると問題が明らかになってきて、どういう問題があればどういう手法でそれを改善していくかという、そういうやり方、一般的なやり方なんですけども、それをどんどん取り入れたいというふうに私は考えています。市長さんがその辺をまた旗振り役でもやってもらってどんどんそれを進めていくと、今グローバルな社会にどんどん進めて行って、またデジタル化って進んでますよね、情報化が。それを活用することによって教育行政含めてまた教育の現場においてもどんどん改善ができると思います。実際にこういったタブレットが入ってくると、今までは貧困の子供たちに情報として非常に少ない情報から、皆さんが同じ教育の財産を持って、それからどんどんどんどん取り入れることができるので、それを推進することによって、それまで格差があった教育の格差から、特に下位層ね、教育によっては下位層にいる人たちを上げていくと、そうすると全体、高砂全体の教育のレベルが上がって行って、それが好循環になっていくというふうに思います。それと市長さんが今考えがあると思います。高砂覚醒、活気がある高砂に持っていくその下支えになるんじゃないかという考えていますので、特に今、高砂自身がベッドタウンでなくて、結局昼間人口、夜人口どうなんだという大問題があるじゃないですか、働きには来ますけど、寝るときは外へ行く、それはなぜかというたら、それは不十分なところがあるから、何が不十分かというところをそれを改善するためにもいろいろ企業でいろいろ進められた、もしくは民間人として今まで進められたところの視点で、切り口でどんどん改善していくといいんじゃないかと私は思っております。それが結局はデジタル化も進んでいく、世の中にどんどんついていくということ、グローバル化についていくということ、予算にもALTとか情報関係などが入っていますけども、もしそれで不十分であるという結果が数値化することによって分かれば、さらにそこにどう投資するか、もしくは費用対効果を考えるかっていうのもどんどん切り口を少し進めて行っていただきたいなあと、私は期待しております。私も期間がもうあまりないんで、言うことしかできませんけども、そこはお願いしていきたいと思います。

○都倉達殊市長

ありがとうございます。

今のお話、教育長、何か。

○衣笠好一教育長

教育長です。

山名委員さんから布施委員さんおっしゃったこと、本当に全く今の社会状況見たらそんな、学校の教師または学校の関係者だけで子供たちを育てるというのが困難というか、無理なような状況に今なっている中で、特に最近言われているのは地域とともにある学校というのをよく言われるんですよね。地域ってというのは、地域住民の方とか保護者の方をイメージするんですけども、市長おっしゃったように企業もそうですし、今、山名委員さん言われたような専門、特別支援が必要な子供さんの関わる専門機関も地域というふうに捉えられますし、そういった高砂市内にある、またはひょっとしたら高砂市外でもそういった連携すべき関係機関の地域と捉えて、そことともにやっぱり学校の中に

そういう方も入って子供を育てるといふ、この考え方がやっぱり大事かなど。その中で、教師だけが自分の価値観で子供を育てるんじゃなしに、いろんな形で御意見頂いて、先生のおっしゃったような可視化、見える化、または数値を明らかにして学校の関係者だけの価値観じゃなくて、いろんな御意見を頂きながら課題を明確にして取り組んでいくということが大事だといふのは、御意見聞かせていただいて、そういうふう感じたところでは。

○都倉達殊市長

ありがとうございます。
どうぞ神尾委員。

○神尾信作教育委員

私も似たようなことなんですけども、今日、教育予算ということで、今のタブレットだとか空調とかいろんな教育予算の施設面には全部お金をかけていただいて本当にありがたく思っております。今、コロナ禍で、じゃ、何が教育予算で求められているかといふところなんですけど、ちょっと一部重複する部分はあるんですが、やっぱり人材だと思うんですよね。今の地域の方の人材も含めて。学校をサポートしていただける人材をいかに確保できるかというのが一番のこれからの課題かなと思います。特に小学校・中学校現場はですね、今年は小学校が新学習指導要領が今年からスタートし、来年は中学校なんです。そういう授業を教えるということだけでも随分負荷がかかって、このコロナ騒ぎで消毒だとかいろんな検温だとか、今までなかったいろんな業務が本当にたくさん出てきています。その中で、やっぱり教師が、現場にいる教師が一人一人の子供をちゃんと見る、学力をちゃんとつけていく、そういうことをする、先ほど山名委員がおっしゃったいろんな特別な支援もある、子供たちにも手を差し伸べる、どの切り口を取っても、結果的にはやっぱり人材、マンパワー、やっぱりどんだけそこにお金をつぎ込んで人を集めてといふところだと思うんです。学校の現場はどうしても、今プラスプラスでやってきてなかなかマイナスができない、切り離せない状況だと思います。ですから、そうならば結果的に現場のそういうことを少しでもマイナスにしようと思ったら、そこにもやっぱり人が要するといふところでお金をかけるんだったらマンパワーのところにかけていただけたらと思います。先ほどから例えば今回の予算で教育部長さんのお話がありましたが、例えば情報処理だったらICT支援員だとか、介助員とかスクールアシスタントとか、そういうところはこういうところは現在も頂いているんですが、やっぱりもう少し増員していただけないかとか。あと、例えば今年だと県の企業でスクールサポートスタッフですかね。それは私、現場の教員に聞きますと、本当に助かったなど。そういう人たちは例えば消毒作業とかしてくれるんですね。あと、印刷とかもしていただける。ですから、そういう部分をそういう方が担っていただいて、教師は違うほうに力を注げるといふようなところもありますので、ただそれをこのままでいけば今年なくなってしまう。なら、次に打てる手は、市がそこにお金を使って同じようなことをしていただけると、いふようなところでやっぱりいろいろ考えるんですけど、どうしてもやっぱり人材をどのようにして集めるか、そういうところが大事かなと思います。

先ほど、山名委員から出たように、例えば明石のですね、35人学級といふような話が出てましたね。そこに行ければもちろんすばらしいんですけど、これがなかなかすぐにはできない。一朝一夕にはできない。そうなる、そういうことを見越して、それが3年か5年か分かりませんが、ちょっとその辺もまた見越して長期展望の中でそういうことを考えていただけたらな。そんなことを思います。もちろんそこにも人材が必要といふことを思いますけど、いろんな教育予算という中ではそういうことを特に願

いしたいなと思っております。
以上です。

○都倉達殊市長

ありがとうございました。
吉田委員。

○吉田美香教育委員

すみません。大変たくさん予算をつけていただきまして、ありがとうございます。この予算を最大に生かせるように教育委員会のほうでも頑張っていきたいとみんな思っていると思っております。

それですね、教育委員会だけではできないことっていうのがいろいろありまして、そちらのほうでは市長さんも一緒に考えていただければなと思っております。例えばごく一部ですけれども、学習どころではないという家庭環境の子もやっぱりいるわけですね。その日その日を生活していだけで精いっぱいという家庭も現実にございます。そうしますと、子供の学力とかそんなこと今、どうでもいい、明日どうするかなの、というおうちもやっぱりあるわけですね。そういう中で、やっぱりその子は6年間なら6年間、その中で過ごしてしまっていて、学業って後戻りできませんから、そのまま社会に出ていくわけですね。そういうことに対してはやはりどういう方法があるのか、いろいろあるのかもしれない。市のほうでもやはり何かの形でそういう子供たちを救済していただければということ、強く感じております。親の世代からちゃんとしていかないと、やはり子供は安心して机に向かえませぬので、そここのところをまずお願いしたいと思っております。

それともう一つは、つながりづくりというんですか、例えば中学生、ある地域では総合的な避難訓練、そういうものを通して、これが教育委員会だけでもどうしようもないし、市だけでも難しいと思うので、共催になると思うんですが、中学生っていうのが一番地域の中にいる、昼間いる人たちの中で力があるんですね。体力がある。高校生以上になると外へ出ていっている場合が多いです。そうすると、中学生っていうのは一番体力もあっていざというときには動いてくれるんだというのが被災したところの方みんなおっしゃいます。そうすると、高齢者であったり、幼児であったりっていう人たちを移動させたり、避難させたりっていうのは中学生の力が一番役に立ったということをよく聞くんです。そうすると、中学生自身も自分たちが部活で毎日体力をつけて、これは試合で優勝するためだけじゃなくて、いざというとき誰かの命救えるんだという思いを持ってトレーニングしていくというのは、また一つ非常に意味があることだと思いますし、そういうようなことで何かそうやって地域の高齢者、例えば自分がいざというときにあの人助けるんだと、あの子を助けるんだと。そういうつながりっていうのが孤独感を癒してくれると思いますし、何かお互いにその地域のあったかいものをつくってくれるんじゃないかなと思いますので、そういうようなところをちょっと考えていただけるとありがたいなと考えています。お願いいたします。

○都倉達殊市長

ありがとうございます。

吉田委員からのお話の中で、やはり私も地域づくりの中で、やはり今、家庭環境、特にこのコロナによって大変困っておられる御家庭があるのは存じ上げていますし、また、市のやっている学童に関しましても年々やはり増えているような状況でもございます。そういった子供さんたちの教育環境、そういったことにつきましてもやはり市としても

いろいろこれから考えていく必要があるというように考えております。

それと、中学生の生徒さんがやはり地域で育みながら、いろんな世代間交流の中で思いやる心とか、また、優しい気持ちの中で協力できることは何かないのかなというような観点でやはり地域づくりも考えていく必要があると思っております。お話の中にできました熊本の大きな水害が発生したときにも、あとの被災に遭われた方々のところへ行ってボランティアとして活躍しているような高校生、中学生の方々もおられました。今回豪雪地帯においてもやはり雪下ろしをするのにもボランティアで動いているような生徒さんもおられるというように聞いておりますし、やはりそういう気持ちを持った活動をするためにも、それはやはり事前にいろんな教育現場だけではなく、市としても災害に備えるためにはそういう力も大変重要なことだと思っておりますので、今、吉田委員が言われましたようなところにもこれから注視しながら、地域づくりの中の考え方の中では入れていく必要があるだろうと思っております。

教育長、何か今の内容であれば。

○衣笠好一教育長

教育長です。

先ほど、地域とともにという話で、地域に支えられて子供たちが育つということをちょっと述べさせていただきましたが、吉田委員さんのお話を聞かせていただいて、自分たちが地域に支えられている、または守られているということはもちろん、自分の地域を愛するということが大切な気持ちだと思います。だから尊重したいと思いますが、自分たちも何か地域のためにできないかっていうのも確かに大切な能力、資質だと思います。全国の学力学習状況調査の質問紙というのがあるんですが、これを見ましたときに、いろんな学力の面とかの全国と比較しましたときに、高砂市の中学校3年生、小学校6年生は地域の行事に参加している率っていうのは全国よりも上回っていたということがありましたので、地域に関心を持っている子供さんもたくさんおられると思いますし、いろんな伝統的な文化の中に参加する中でも地域を愛する気持ちというのは常に子供たちが持っているように思いますので、その気持ちを自分たちも何か役に立てるんだというふうなことに向けて取り組んでいくということはすごく大切なことだと思いますし、そのことによって自己有用感と言うんですか、そういうようなことも育つというふうに思いますので、今、お聞かせいただいたことを、投げかけていきたいというふうに思っております。

○都倉達殊市長

ありがとうございます。

ほか何かありましたら。

○布施隆志教育委員

あと高砂、今いろいろと改善活動、教育関係やっていきまして、残念なことに平成29年に神戸新聞においては、教育、先ほど教育長がおっしゃった学習状況調査結果という成績がばっと出されて、高砂市の小学校・中学校においては国語と算数の話なんですけど、算数及び数学ですね、全国平均を全て下回っているという、そういうふうに悪評が叩かれたんです、ばっと。これっていうのは非常に我々にとってもショックなことで、教育関係者としてはやはりこういうことが書かれた限りは、それをやはり臥薪嘗胆して会稽の恥を雪ぐという気持ちでやっぱり向かわなきやいけないっていうことで、かなり改善していつているんです。実際にこういうパンフレットも解析パンフレットも平成30年度からリベンジという意味でですね、やられたらやり返す、倍返しだというつもり

でこのデータを基にそれで先生たちも一丸になって、成績を上げてきているんですよ。昨年度は残念ながらコロナの関係で成績が出なかったんですけども、それ以降31年、それと令和元年ですね、それは成績はどんどん上がってきているんですよ。実際に比較すると加古川にも勝っている部分があるところ、そういう悪い評価を新聞紙に出される、だったらよかったこともやっぱり公表していただきたい、そのために何が必要かといったら広報だと思うんですね。やはり高砂ではいろんなところでいろんな活動で非常に褒められることも多いんですけども、それが実際に伝わっているかという、伝わっていないというのが事実で、そうすると悪い評価を出された場合にはその評価をもって一般人の人たちはああ、高砂ではな、というふうな感じで思ってしまうんです。それが非常に我々としても、せっかく頑張っているのに、そういうふうに見られたのはやっぱり残念、非常に残念、そこを何とかね、市全体でもっと高めることはできないのかな、これはもう前々からそういう思いで我々ずっといたんですけども、何とかね、いいことがあったら、吉田委員さんがよく言われているコウノトリの関係団ってどこよりも頑張っているんですけどね、それがじゃ、表に出ているかっていうと、高砂市の表に出ることはそうそうないとかね。本当にやっていることを市としてもっとアピールする力はないのかなというのが私、ちょっと思うんですけども。

○都倉達殊市長

成績の関係におきまして、前回もお話聞かせていただきました。それはまた教育長のほうからもコメント頂きたいと思っておりますけども、やはり今、布施委員のおっしゃられたPRということに関しましては、やはり子供たちだけではなく市全体を取り上げて他市または県外、全国に向けての発信もいろいろ考えながらこれから取り組んでいこうとしております。また、シティープロモーションという中でそういう部署も今度設けますし、教育関係のやはり子供たちが活躍している場面とかそういったこともやはり発信の材料としてどんどん発信していきたいと考えておるところでございます。

学力向上の関係でありますか。

○衣笠好一教育長

いつも布施委員さんは教育委員会の中でも29年度のマスコミに公表したときの全国よりも低いという、あんまりいいイメージのないようなことを何とか頑張れというお話を、激励を頂くんですけども、その今、布施委員さんおっしゃったように、このことをきっかけにといいますか、学力向上対策会議というのを立ち上げて、それぞれの先生方が各学校から集まってきました、委員の先生方が集まってきました、家庭での学習であるとか、または学校での授業の改善であるとか、また学校の環境整備について議論をしながら、取り組んでいるところなんですけども、やっぱりアピールするといいますか、PRするというのはやっぱりこれからどんどんいいことをやったときにはどんどん積極的に新聞だけじゃなくて、いろんなところで広報していく、いうことは求められておりますし、子供たちはそれを見て、あ、高砂市っていいなと思えるような、成績が悪いときに駄目やっていうふうなイメージがもしあるとしたら、それを払拭するようなどんどん良さをアピールしていきたいというようなことを思っているんで、今後年度末にもいろんな家庭に向けたリーフレットとか作っているものもやっぱり広報してアピールして、子供たちが胸張って学校に行き、胸張って温かい家庭に帰れるような思いを持っていただくような取組は、積極的に進めていきたいというふうには考えております。

○都倉達殊市長

ありがとうございます。

余談になるかも知れませんが、このたび選抜出場決まりました東播磨高校、その部員の中に高砂市内の生徒さんが、この前、監督さんと校長先生も来られまして、たしかマネージャーも含めて4人おられるというように聞いております。そういう中にですね、高砂市の生徒さんがおられて、また校長先生、監督にも頑張ってくださいということも申しあげましたし、ぜひ市役所に生徒さんを連れてきてくださいということもお伝えしております。そういったやはり体験をですね、してもらいながら高砂市を背負ってまた活躍していただきたいというところにおきましては、後押しをしていきたいなと思っております。

○吉田美香教育委員

いいですか、すみません、先ほどのことなんですけど、そうやってスポーツはね、そうやって出していただけて、スポーツってすごく分かりやすいじゃないですか、だからいいんですけれども、お勉強に関しては非常に分かりにくいですよ。それで神戸新聞に悪い成績が出たというのは、どれだけの子供の自尊心傷つけたか分からないんですよ、あの記事は。保護者の方もね、ショック受けられた方結構いらっしやいましたし、でもそのおかげで頑張らせてあげていこうということで、あの記事のおかげで上がってきたというのがありますのでね、やはりそういうことに対しておかげさまで、記事のおかげで私たちこっだけ上がりましたので、ありがとうございますということで、こんなに上がりましたというのをもらっていただけたらありがたいなと。

○都倉達殊市長

発信の仕方を変えて。

○吉田美香教育委員

はい、ですからやはりそれは子供たちは平均で出されていても自分の成績なんですよね。その中に自分も受けているわけですから、ですからやっぱり自分の成績を叩かれたって意識はやはり持ちます。ですから、今度はよくなったら褒めてあげてほしいと思いますので、その辺のこと、ちょっと子供っぽいかもしれませんが、やっぱりちょっと上がった褒めてもらえるようなものを書いてもらえるように御配慮いただけたらありがたいと思いますので、お願いいたします。

○都倉達殊市長

はい、おっしゃるとおりで、スポーツだけではなく、やはり勉強であるとか、また生活の中で何か1つでも出していけるようなね、PRできるようなことをやはり努めてやっていきたいと思っております。

○山名克典教育委員

いいですか。僕もそれはすごく思って、結局神戸新聞見れば明らかに東播地区の記事の中で、加古川の記事が多くて、あるいは高砂の記事が本当に少なく、教育委員会的な発表があったやつでも教育委員会はいつこんなに出たかなと思って、過去のいつか分からないようなやつが突然発表されたような形でね、時期ずれて載ってしまったとか、これは教育委員会の広報なのか、それとも神戸新聞の捉え方で紙面が空いたら載せますというような形のね、向こうの都合で言われているんかもしれないけど、やはり教育的な施策にしてもいろんなことのやっぱりもっともっとアピールしていかないと、これ実際いろんな市内の中でのいろんなこと、教育のことに関して、先ほど言った学校へ訪問されて授業を行っていること、あるいは企業との連携の中で、結局あれも初めはトライ

やるウィークのときになかなか企業が出てきてくれなかったんを口説いてもらって、企業どうですかって、企業の中でのアピールだけよりもやはり外へ出てもらって、教育の、地域の中へ出てきてもらったほうが、先ほど聞いたときにありやということがあって、そのほうがやっぱり動いてくれるでしょういうことで、進んでいったと僕は理解しておるんですけどね。そういうのでやはり、企業にとっても宣伝というよりも結局子供に対しての職業選択に対しては、あるいはいろんな知らないこと、学校の中で学んで得られないことの、視野を広げるためのことで、人間性を広げる、すごくいいことだと思うんです。ただしそういうのをやっていることはね、やはり市内の人たちもそやし、他市に知らせる必要はなかなかないんかも分かりませんが、市長の言っているプロモーションの中からいわば存在感あるいはアピールするためにはやっていってほしいと思う。それで実際それで結局高砂のやっている教育はやはりそれなりに十分本当に魅力ある教育施策いろんなやって、実際に現実としていろんなことやっているということが伝わってくればね、住民も満足感出るし、そして子供たちもそれなりに自分らのやっていることは常にみんな注目してくれているということ、自覚が出ればやはり自己肯定になって、やはり本当に自信ついてくるだろうと。だからそんな意味では、高砂のやっていることの、新聞は今、どれだけ取っているかというのも分からないんですけどね、新聞購読料が購読者が減ったことでなかなかそういうのが伝わりにくいのは事実あるんですけど、いかにしてそういうのを子供らに逆に自分らのやっていること全部みんなが見てますよという形のね、ことを伝えてあげたら自信につながる、本当いいことだと思います。マスコミに対してどれだけそのようなことしてくれるのか難しいところやと思うんですけどね、ちょっとこれも公の場ですから、露骨には言えませんが、だからもっと高砂のこと、確かに興味ある、マスコミにとってもこれはすばらしいと思うことであれば当然取り上げてくれるんだらうと思うからそれなりの、斬新なことしなきゃならない、特別なことしなきゃならないことはないけど、地道にやっていって成果を出していけばいいんだらうなと思ってますけどね。

○神尾信作教育委員

教育委員会でもちよくちよく話題になることなんですけども、いわゆる学力向上、全国学力学習状況調査の平成29年度の数字というところで、私も元教師ですから、当然成績はいいのにこしたことはない、ただ、どうしても数字っていうのは説得力があって、それも随分低かったらやっぱり分かりやすく叩かれるという怖さはあるんですけども、じゃ、それが平均点になりました、平均点は若干上がりました、当然平均点を下回っていて上がってきたらもちろんオーケーなんですけど、じゃ、どこに到達点とか目標値を求めらんだということから含めてね、僕は数値にあんまり一喜一憂はしないほうがいいのかなという思いなんです。元教師である僕がそういうことを言うと、何かあんなのときも低かったのとかね、いろんな変な考え方をしたら嫌なんですけども、ただ、あくまでも小学生、中学生の人間としての一部が数値化されたものであるというところを僕はやっぱり重きを置きたいんですよ。例えば、先ほどの市長さんのお話の中で、思いやりの心だとか、ボランティア活動だとか、教育長さんの言葉の中に、地域で子供を支えるとか、子供は地域で育てるとか、あと行事への参加率が高いとか、こういうところはいわゆるアンケートで数値化はできているんですけども、その辺の人間性というか、高砂で育て、また高砂に帰ってきたいと思う子供を育てるときに、学力で平均点全部ありました、という見方と、やっぱり人間全体として人間性としてその子供を見るのかというところがやっぱりあると思うんですよ。ですから、もちろん平均点なかったら悔しいし、もちろん頑張らないといけない、それは教師も保護者も地域も全体で頑張らんとあかんねんけど、その悔しさは分かんねんけど、そこをほんまに取り上げてしまうと、僕はちょ

っと違和感があって、その部分でね、同じようなことを教育委員会の中でもやっていて、僕はちょっと違う部分から学力向上についても人間性を高めるということで違う部分からちょっとチャレンジしてほしいなという思いがあるので、ちょっとだけ、その部分は。

○山名克典教育委員

僕もあれなんですよ、この前は教育委員会の中でいつも議論するところなんですけど、結局数値化することが見える化、確かに見える化も大事、数値化と見える化とはちょっと違うんで、見える化に関して結局、今、先ほど言ったそれぞれのいろいろな教育施策そのものがされていって、それをみんなにアピールしてください、それが見える化であって、結局それを住民の人たち、保護者、みんながそれに対してやっていることに対して満足感がある、結局満足を得るためにはそれなりの成果を上げているということが出てくると思う。その成果が必ずしも数字では表せないことってあると思うんです。先ほど、例えばの例であれば、LDの子がそれなりの字書いたり何やかんややってしていったとしても、普通は大体一、二年ぐらいの遅れのあれば、LDという形で診断ついていきますけど、そういう形の状態がさらにゆっくりゆっくりにせよ、教育の課程で今言いました少人数の状態、あるいはサポーターがおるとかアシスタントがおる、それなりにしていくと、その遅れがやはり取り戻せていける感じの状態、遅れてしまうと2年、3年の遅れがある状態が明らかに取り戻せていっている、いわゆる短縮している、漢字の覚えられる数もどんどんどんどん減ってきている、増えてきて覚える数が増えてきて、トータルによってはどれも見える化で明らかに5年生の子が今までやったら2年生ぐらいの字が書けなかったのが、3年生の書ける、4年生の分書けるようになってきた、そういうのを数値化するってなかなか難しいところ。これがやはり保護者もそうだし、結局本人もそうだし、教育を実際そこでしている学校の先生、全体として携わっている担任の先生なり、その先生、みんながすごく、あ、やってよかった、それなりの教育システムきちっと時間をかけてやれば、子供の教育に関しては進歩が得られた、やっぱりそこがすごく満足感ある、そういうのが実際に成績として見えるのも、どんなふうに表示するかもあるけど、やはりそういうところが大事で、結局充実感・満足感あって、子供のそれなりの数字が今言ったように、何年生のテストが、発達テストがここまでできてきたという形で、それも数字かもしれませんが、そういうことの繰り返しで結局それなりのやっぱりこれがはっきり表現しにくいんですけど、みんなが満足感、充実感持ってやってきているという形ができてきたらね、やっぱりすごく市内の教育というのは変わってくるだろうと、そういうのをみんなが認識できたらね、ほかの普通の授業の中でもみんなの勉強の仕方そのものに関してのやはり、こんなふうにしています、こんなふうにしていますというのがやはり伝わっていけば、結局そういうもの次々変わってきて、地域の中で教育支えていこうと、やはり頑張っていこうという、そういうのが成績点数云々よりも高砂市内の教育はやっぱりすごく変わってきたと、充実してきたと、やはりみんな子供の目の輝きが変わってきたと、地域の中の関わりも変わってきた、といういろんなことが出てくればいいと思うんです。なかなか難しく表現しにくいんですけど、数値化と言わなくてもあり得るかなと思うんです。

○布施隆志教育委員

数字っていうのは一種の、一つの手法であって、見える化っていうのが最も大事だと。その一部の手法として数値を使うと。数字ありきじゃなくて、見える化ありきなんです。結果を捉えるためにやったことの評価をするために、どう見える化するかっていう。だから数字っていうのは一種の手法であって、見える化していって全体が改善していくというふうにつえ方、それをどう捉えるかっていうのが、昔のやり方はもう旧態依然のや

り方で感覚でやっていたのが、結局感覚だけじゃ、実際それが効果があったのかどうなのかっていうのは分からないので、それを見える化していこうっていうのがそれはトヨタイズムっていうところから始まって、もう2000年から始まっている手法ですよ。それをやっていって、グローバルにどんどん攻めていく、ただしもうそれをグローバルな、既にそれはやっていっているから、ITだってデジタル関係のですね、それだってグローバルの語学力だって、世界は日本の先を進んでいる、そういうことを言いたいですよ。だから一種の指標であるけども、それを見える化していくことによって改善していこうということで、それが見えなかった場合には数字がなかった場合には、じゃ、どう改善していく、一步進んだのか、それとも踏みとどまっているのかっていうのがわからないので、そこを皆さんで共有化する、見える化する、要するに可視化していって、それを必要な人は可視化したものをとる、あとは、必要なかたにできるだけ見せるものは見せたりする見える化っていう、そういう手法に持っていくというのがやはり今まで抜けていたと思うんですね。数十年来ずっと同じ、旧態依然のやり方をずっと進めてきたというのがやはり日本であって、高砂であるかというふうに思っております。だからそれで進めていきたいという考え方なんです。

○衣笠好一教育長

いつも今、こういう議論になると、長くなって、本当に委員の皆さん熱心に。

○都倉達殊市長

もう一つ議題があるんで。

○衣笠好一教育長

課題がもう一つありますので、今、委員の皆さんおっしゃったように、確かに数値、学力調査の結果というのは、学校現場の教師があれば単なる一つのデータであって、気にせんでもええんちゃうと言ったらそれは駄目だと思いますし、やっぱりきちっと意識して、あれはやっぱり指導の改善またはどういうふうに今後の教育に生かしていくかという指標でもあるんで、大事にしたいというふうに思っています。ただ、他の府県のニュースなんか見ますと、状況調査があったときに、子供さんが今日僕休まんでもええのって、僕が入ったらちょっとそれ、成績が落ちるんでというふうなこと、こんなことを言うようなことになってしまえば何のためにやっているか分かりませんので、少なくとも高砂市はそんなところまだ見えませんし、しっかりと子供たちの資質能力の向上ということで先生方向かっていただいておりますので、それはそうならないようなことに十分留意しながらもやっぱり数値はしっかりと見ていくというふうな形で今取り組んでいますので。

○布施隆志教育委員

実際そうです。それを見ながらやっていきましょということですね。

○都倉達殊市長

はい、分かりました。

もう一つ議題がありますので、ちょっと進まさせていただきます。

次に、議題といたしまして、高砂市の公共施設の全体最適化計画の素案につきまして、を議題といたします。資料の説明をお願いいたします。

○古賀裕規経営企画室公共施設等総合管理計画担当主幹

経営企画室主幹です。

それでは、高砂市の公共施設全体最適化計画素案について説明させていただきます。

まず、資料のほう、4ページをお願いいたします。

全体最適化の前に、まず第1回でも説明させていただいた、向島公園の活用というところでトライアル・サウンディングを実施しましたので、その報告をさせていただきます。

まず4ページですが、ここにはトライアル・サウンディングの概要、そして実施スケジュール、実施結果、以上について示しています。このうち、実施結果について次のページの表を見ながら説明させていただきたいと思います。

5ページをお願いいたします。

まず、上の表ですが、参加された事業一覧となっております。

事業の実施期間は、昨年11月7日から12月17日の約1カ月半の期間で実施いたしました。表の見方ですが、左からナンバー、事業者の名称、事業の内容、事業を実施した日、そして事業に参加された人数などの各数量となっております。実施された事業についてですけれども、上段のほうからバーベキュー、自転車BMXのスクールと大会、ロケーションフォト、屋外での写真撮影、そしてSUP、ドッグラン、あと発達児童に関わる児童の支援事業の六つの事業が行われました。1社、青少年を対象とした体験活動のワークショップについてですが、こちらは参加者が集まらず、開催には至りませんでした。今回、青年の家についてもこの事業対象施設として設定しておりました。利用としては、各事業において更衣室であったり休憩室といった利用はあったんですが、実施された事業は全て屋外での事業で、事業の主体として青年の家を直接利用された事業については実施はありませんでした。また、青年の家に限らず、宿泊を伴う事業は期間もあろうかとは思いますが、実施はありませんでした。この結果から、現在向島の利用について主な目的は、宿泊を伴っていない、公園、球場、海浜公園といった屋外空間の活動に利用の価値がある、魅力があると考えております。

ページの下のほう、今回トライアル・サウンディングで得られた知見となっております。

今回参加された事業者に今後官民連携の事業が公募された際の参加意欲について質問したところ、全ての事業者さんが参加したいとの回答でした。このことから、向島の空間では、このたび試験的に実施された事業の内容、規模であったり内容は、ある程度実施可能な感触のあったものと捉えることができると考えられます。

その下、課題や施設について意見を頂きました。

主な意見としては、エリア内の禁止事項の緩和であったり、青年の家の廃止事業を行う上でネックとなるいろいろな制限の緩和や支障となる施設の撤廃や改修などの意見がありました。このような結果も受け入れて、市としては機能の代替えを考え、青年の家を廃止する方向で進めていきたいと考えております。

向島公園に関しては説明は以上です。

続いて、高砂市公共施設全体最適化計画素案について説明させていただきます。

資料の6ページをお願いします。

横向きになっていますが、まずこちらは高砂市における人口減少と少子高齢化を示す図となります。

右側のグラフを御覧ください。

2015年から2045年までの人口総数との割合のグラフです。点線で囲んでいるところが15歳から64歳、いわゆる生産年齢の人口となっております。2015年のその人口は、約6割で5万5,000人。それが2045年では5割程度となり、人口では3万5,000人程度となります。割合では1割程度、1割弱の減少となるんです。

けれども、総人口が減少の見込みというところで、その人口減少の人口は2万人減少ということになります。生産年齢人口が大きく減少しているということで、市の収入であったり、そういったところもやはり減少になると考えられます。

7ページをお願いいたします。

高砂市の人口推移と公共施設の延べ床面積の変化を示す図となっております。

左側の数値、これと折れ線グラフが人口の推移となっております。右側の数値、この数値と棒グラフが公共施設の累計、ずっと今まで増えてきた累計の面積となっております。このグラフをみると、人口の増加の角度に合わせて平行して公共施設の面積は増加しているのが分かるかと思えます。1955年、一番左下のところにあるんですが、人口は4万人でした。その20年後、1975年、この時点での面積は5万平米、この図から見たところですけども、その人口の高さと20年後の公共施設の高さがほぼ一緒になっているというのが分かるかと思えます。1975年のこの上のほうを見てみると、人口の高さを見ると、そこからぐっと横にいただいて、20年後の1995年、ここに関してもやはり同じぐらいの高さになっていることが分かりますかと思えます。1995年の人口の高さを見ると、20年後2015年となります、これもほぼ同じぐらいの高さになっています。1995年の人口は一番高砂市ではピーク、平成7年が人口ピークだったんですけども、人口はそこから減少しております。やっぱり施設についても今後将来世代の負担を考えると、人口減少に合わせた市の背丈にあった施設の総数も減少、縮減しなければならないということが見えてくるかと思えます。

続いて、8ページをお願いします。

こちらは、公共施設等総合管理計画の抜粋となっております。

上のグラフを御覧ください。これは公共施設の総床面積の割合を示したものです。学校教育系と社会教育系を合わせた教育系の施設で、45と6になります、約半分、50%程度を占めることとなっております。下のほう、市は1995年の20年後となる2015年の公共施設床面積を基準として公共施設総合管理計画の中で40年間で30%縮減しようという計画をしております。まずはその一つ、第1段階として20年間で15%縮減をする目標を立てました。これはやはり次世代の負担を軽減するとともに、市が持続可能である公共施設をマネジメントするために行っていく活動になってきます。

続いて、9ページをお願いいたします。

こちらから、この以降が公共施設全体最適化計画素案の抜粋、教育関係のものを抜粋したのになっております。

まず、上から公民館ですが、中央公民館、米田公民館以外については、旧耐震の建物でありまして、今後今から10年後近くには、2030年以降に順次建て替え時期が訪れることとなります。計画では、2026年までに公民館を地域交流センター化していくことを検討いたしまして、2036年度までに移行するという取組を示しております。その後、ほかの施設への機能移転を検討することとしております。

めくっていただいて、10ページをお願いいたします。

続いて、社会教育施設となります。

図書館、教育センターについては維持とし、青年の家については基本運営を他の施設で実施することを検討しております。

最後に学校です。学校は2026年度までに建て替え、または更新時期が近づく校舎の計画、これをどのように更新していくかということを検討し、2036年度までに他の施設との複合化を検討します。また、地区・地域によっては地域に合ったような形で適正規模であったり、必要であればその統廃合とか、校区の見直しを検討することとしております。

最後に13ページをお願いいたします。

こちらは第2期包括管理委託の対象施設と対象業務の図となります。現在、市役所の点検であったり、清掃などの業務をまとめて包括という形で第1期を業者に委託しております。来年度、この包括業務に点検とか掃除であるそういった業務、いろいろな業務があるんですけども、そういった業務を市役所以外の施設も一緒に併せて、教育施設も併せて委託する予定となっております。この資料はその包括業務に含む業務を一覧化しているものとなっております。

説明については以上です。

○都倉達殊市長

はい、ありがとうございました。

今の議題につきまして、御意見を頂きたいと思います。

○山名克典教育委員

いいですか。

○都倉達殊市長

はい。

○山名克典教育委員

常々床面積の減少に関して思うことは、人口が減ってそれに対しての一律で減らしていくことが正しいのかどうか、いわゆる時代とともに公共施設の専有面積いうのもやはりニーズというか、要望というか、そういうのになら変わっていく、時代とともに1人の専有面積広くなってきていると思うんですね。極端な例が避難場所にしたって、結局1人1畳でいいのかどうか、今やったら2畳要るのか、あるいは3畳、それなりのスペースが要るじゃないかという。そういうのもいろんな公共施設も結局小学校の教室にしたって子供の今までの狭い詰め込みの状態、それでよしとした数字の計算の仕方と、今、余裕を持った形の部屋をつくってあげようという形、実際には各家庭の家でもそうでしょうし、それなりのあるからそういうので人口が減っているからということで、3割減ったら3割減らすのかどうかではないかどうか、それなりの時代のニーズによった快適な環境を、快適な面積を確保しながらの減少だということです。それなりに何だったらこういう公共施設の一人一人の専有、どのぐらいの望ましい広さというのは、そのような指標ってあるんですかね。

○古賀裕規経営企画室公共施設等総合管理計画担当主幹

これは人口と総量について示しているという図になってはいますが、学校の面積がそれによって減っていくというわけじゃなしに、学校以外についても総量、施設、市が所有している30万平米っていう、総量になってはいますので、例えば学校以外なんですけども、会議室であったりとか研修スペースであったりとか、青年の家なんかでしたら、例えば研修スペース、和室とかいったところは教育センターとか中央公民館とかにもあったりするんですね。そのようなトータルのところ、例えば他の施設で活用できないか、同じ施設あるのにこちら側でしか使えないというような制限の緩和っていうのを行って、他の施設を使って同じような施設をもっと稼働率を上げていって市の施設を有効活用していこうというのが基本的にありますので、一概におっしゃいますように減ったからそれに合わせるっていうわけじゃなしに、今、稼働率が少ないような部屋を、施設をどうやって稼働率を上げて他の施設を閉鎖してでもまとめられるか、そういったところの観点からまとめていく、そういったところの最適化っていうことに今から取り組んで

いるというところですよ。

○山名克典教育委員

質問の答えとちゃうんやけど、結局これからの一人一人の公共施設を使うに当たって、特に今やったらコロナですよん。コロナやったらディスタンス保たなあきませんやん。昔の状態としてやったら、これが続くわけじゃないけど、1人が図書館やったら図書館で例えばスペースをね、1人当たりのスペースをどのぐらい取ったらいいでしょうかっていう形のね、そういう考え方にこれから変わっていくと思うんですよ。学校の教室の中でも1人のスペースがどのぐらいのスペース、1人の占有スペースがどのぐらいあったらね、快適な勉強の仕方ができていくかという形の。結局そういうのに対する何らかそういう指標を持ってやられているかということをお聞きしたいんですけどね。

○松本匡茂経営企画室公共施設等総合管理計画担当参事

経営企画室参事です。この計画につきましては、アクションプランっていうのを3年に一度見直して、全体の計画としては10年に一度見直しするようにしています。今やっぱり今言われたように、時代時代のニーズによって、この見直しで修正かけて取り組んでいきたいと考えております。

○麻敏浩企画総務部参事

すみません、企画総務部参事です。

この公共施設の再編計画の前提はそういう1人当たりの人口とかそういうのは実際考慮していない状態です。まずはそもそも今の施設を全部建て替えたなら建て替えることがしようとしたら、この40年間で1,355億円かかると。1年間で約34億円必要やということです。今、投資的経費ってそういう公共施設であげてるお金が18億円しかあげていないんで、15億円も不足するということで、今ある施設全てを建て替えることができないということです。建て替えることもそうですし、大規模改修であったりとか、修繕工事費も捻出できないということで、それを1,355億円を40年間で30%施設を減らさないとそれを賄えないということで、何が必要な施設か、何が必要でない施設かというのを判断して計画的に面積を縮減していこうというのが前段でした。ですので、今、この最適化計画の中で2036年20年間で約20%を減少したら計算的には残った施設については建て替える費用が賄えるということで、そういう形で進めたいということ出しております。ただ、今先生が言われましたように、また学校なんかでも35人学級とか言われておりますし、そういうスペースの確保というのは、必要ですので、学校は今、建て替えるときに減築という考え方でさせていただいておりますけども、特にはそういう1人当たりの面積とかも考慮していかないというところはこちらも思っております。また、それからさっきのICTとかいろいろあるんですけども、その教室の使い方とかそういうところもまた変わってくる可能性があるんで、その状況も見ながら面積とかいうところは考えていきたいというふうに思っております。

○神尾信作教育委員

ちょっと教えていただきたいんですが、8ページの今の割合がパーセント出てますよね。学校教育系施設が45%か、これは高砂市内での割合は非常によく分かるんですけども、高砂市の考える適正な割合、パーセントだとか、あとは近隣の他市でも同様な多分こういう分類をしておられるような気がするんですが、他市の特徴と比べて他市のデータと比べて、高砂市の特色とか何かあるんですかね、この施設関係が多いとか少ないとか。理想とすればこれぐらいの割合がいいんじゃないかみたいな話だとか、そういう

のがあれば教えていただきたいです。

○麻敏浩企画総務部参事

企画総務部参事です。

大体どこの市町も学校が一番、半分ぐらいは。あとは、市営住宅が、公営住宅ですね、高砂は6%ですけど10%ぐらいのところもあります。あと、病院とかを持っていないところは病院がないところもあります。特徴としましては、大体平均的なバランスかなというふうには思っております。

○山名克典教育委員

いいですか。この今のこととは別で、向島のことですけど、個人的意見です。僕ね、この向島のアクセスの問題で結局問題があるということがあって、あっこでいろんなこと、花火やったりとかいろんなことやってもやっぱりちょっとリスクが高いんじゃないかとかいう話するんですけど、ハザードのこともあるんですけど、ただね、僕すごく思うのがそこから道は1本しかないんですけど、それとまた話ちょっと今飛びますけど、高砂市内の観光巡りのときに、高砂神社、工楽松右衛門行って、そしたらここへ行くときどうするかということがあって、結局ぐるっと回ってもう一回戻らなあかんのでね、結局その高砂市内の観光地をアピールしてもここせっかく県立であってそれなりのところ、アクセスが非常に悪いですやん。ここで問題になっているようにアクセスが悪いと。一つが僕は自分で思ったのがね、これ堀川のところからね、全くの思いつき、これまでずっと思っておることがそうなんですけど、堀川のところをまたぐような形でね、向島にね、渡れるようなコースというのがね、設定できないのかどうか。そうすると、結局観光巡りの形であって、向島のさらに有効な利用というのがあって、結局向島で何かやっとなるときにも避難所として逃げ場所としてはそっちに逃げられるんじゃないかという形の。実際、堀川の高砂町側のところは、あそこ何かもう廃材置場みたいになっておるんですかね、何かカネカの資材置場みたいになってませんか。堀川の高砂町側。

○都倉達殊市長

ああ、向島の反対側。

○山名克典教育委員

反対側ね。そこを結局船はいっぱいといとるけどね。そこから、またいできれいな大層な橋でもなくてもいいけど、そうしたら巡回して歩いて観光来られた方が工楽松右衛門を見て、それで高砂神社行って、そして向島行くのにどないしようかと思ったら、ぐるっと回らないと諦めるやろなと思うから、それが行けたらね、いいかなという、それも1つそういうアクセスができて、ルートができたならそこを有効利用できるだろうし、もう一つ最後に、これを最後に聞きますけど、向島の中で結局宿泊施設として使うのは非常にリスクが高いということがあって、ハザードマップ上ね。そういったときにここを実際トライアル・サウンディングやられてもそういうのはなかなかなかったとしたら、そこは僕の考えでは更地にして、結局それでいざいざときの避難場所できるような形、それでなおかつそこで店でも、仮設の店出せるようなね、いざなったら逃げる、ここと一緒に、ここを1階にするのと同じような発想で、何かそういう雨が降ったらどこへ避難できる、そういうものの施設があってくれたらいいなと思うんですけど、そういう計画ってあるんでしょうかね、今。一つ案だけで聞いていただいとってもらって結構ですけど。

○都倉達殊市長

今の質問に対して。

○松本匡茂経営企画室公共施設等総合管理計画担当参事

経営企画室参事です。今、言っていただいた意見はもっともな意見だと思うんですけども、現在のところそういった計画の検討に至っておりません。

○山名克典教育委員

検討してくださいな。

○麻敏浩企画総務部参事

アクセスの問題はトライアル・サウンディングするとき、民間さんからいろいろ御指摘頂きました。その中で先生言われるように、栈橋つけたりというような、そこまで可能性あるのかいうたら、まだそこはまた今後の検討課題にはなってくると思いますけども。

橋を造るといったら、堀川の向島との対岸のところ見たら、割と船がまだ入るところなんで、通常の橋では難しいいうところは聞いてます。ちょっとそこは今後の検討課題にさせていただきたいのと、例えば来年度青年の家の指定管理期間が満了します。ですので、来年度にあそこをどうするのかというところは、今年度中には決めていって、それで例えば先生ゆわれたようにあそこを更地にするんでしたら、次の公募をするときにそこをどのような活用されますかいうのを民間事業者から聞こうというふうには思っております。その中でそういう御提案の、今回こういう事例でこういういろんなことができたというところがあるんで、ここにある事例分を紹介してあそこの活用方法を民間から提案もらえればなというところを今考えておるところでございます。

○都倉達殊市長

私のほうから1点だけ、今回向島公園につきましては、トライアル・サウンディングをやりまして、いろんな事業者に参加していただきました。それと今、内閣府のほうにサイクリングツーリズムということで、申請をしております、地方創生の関係で。高砂市、北のほうには山持っていますけど、フラットなところがありますので、やはり自転車に関してちょっと地方創生の取組をしようとしています。ただ、観光だけじゃなくてやはりこの通学・通勤の中で自転車事故が大変多い地域になっております。そういった点を捉えて、やはり教育、自転車の交通安全に対する教育も含めて取り組んでいこうかなと。そういう中でやはり今、向島公園だけではないんですけど、いろんなポイントポイントで、自転車といえども観光していただきながら、飲食店を含めて地域の活性化、そういったことにも取り組むような計画を今、申請を出させていただいております。それが予算化されましたら、そういう取組を地方創生の中でやっていきたいと思っております。

○吉田美香教育委員

向島公園は、私もこちらに来ましてから、いろんな方、外から来られた方、必ず御案内するんですけど、すばらしいとみんな喜んでくださるんですよ。ですけど、土手の下、道1本ですよ、行くまで。帰りにグラウンドの野球場のほうの終了時間と重なってしまうと、全然動けなくなって、何度か立ち往生しているんです。それも1回や2回じゃないんですね。だから、どんなにすばらしいイベント、いろんなイベントできるすばらしい場所だと思うんですけど、あの道を何とかしないと、あそこがどうにもネックだなと。少人数ならいいんですけど。あれでは何かあったときに今度逃げるとなったら本当

に大変なパニックになると思いますし、あの道がもったいないかと常々思っております。何とかならないのでしょうか。

○都倉達殊市長

昔から白砂青松で知られたこの地域が臨海部のね、工場ができたことよっての経済的なメリットがあったわけですけど、やはり向島公園を残すというね、昔の方々の努力であれが残っているわけで、その前の国体のときにも会場として青年の家が造られたと聞いていますし、確かにあの1本の道しかないというアクセスが大変、今現在に至っているわけでありまして、その辺の改善策というのがなかなか打開策が出てこないのですが、市としても県のそういう海浜公園の位置づけもありますので、その辺のなかなかね、土手の道路拡幅、いろんな大橋もありますし、そのアクセスについては将来に向かってどうするべきかということについては、都市計画も含めて考える必要があると考えております。ただ、すぐに打開策があるというのはなかなか出てこないわけでありまして、検討課題として考えていきます。

○神尾信作教育委員

一応原案としては青年の家はなくなるというような話を聞きながら、伺いながら、私また違うこといってしまっても一応参考意見ということでお聞きいただきたいんですが、私の経験上でいうと、青年の家泊まって、部活動なんかでね、泊まってそこで宿泊をして1泊2泊して多目的グラウンドで練習試合し、砂浜で走ると、すばらしいセットで、それも砂浜があり、海浜公園があり、多目的グラウンドがあり、そして青年の家で休憩したり泊まる場所があるというところで非常に、今回トライアル・サウンディングでは屋外だけという、先ほど御説明ありましたが、やはり屋外とちょっとね、屋内の1階建てでもいいんですけども、ちょっとくつろげる、雨が降ったときにしのげる、ちょっとお土産がある、高砂名産があるというふうなことで、何かトータルに屋外、インドア、アウトドアが両方あるような形にするためにはやっぱり青年の家を使うか、解体は別としてちょっとそういうインドア的なものがあれば、すごく完成度が高いのかなど。花火大会とか僕見に行きましたけど、本当にすばらしいロケーションで、ただそういうことになってイベントするとなると、今ずっと言われているアクセスがね、問題になっていて、そこを解決しないといけないとは思いますが、本当にあそこにやっぱり青年の家はそれなりの存在価値があるのかなということ、僕思いますので、何かちょっと今みたいに立派な建物でもなくていいんですけど、何かあったらいいのになと、私はそう思います。

○都倉達殊市長

その点につきましても、将来を見据えて神尾委員言われるように、何らかの形の設備を設けたいなという考えはございます。それが市がやるのか、PFIとかいろんな形でこれから取り組んでいこうとしているんだという。

ほかにありませんか。

よろしいですか。

それでは、その他ということで何かございましたら。

○吉田美香教育委員

すみません、市長さん、中学校ずっと回られて、授業されたということなんで、中学生たちと接せられて、どのようにお感じになられたか、子供たちに対してどんなことをしてあげたいという何か感じられたことを教えていただけたらありがたい。

○都倉達殊市長

そうですか。これは私、4月に就任してから教育長さんをお願いをしておりましたところ、昨年10月にこのコロナのちょっと第2波が収束した折を見て、計画させていただきまして、各学校、中学校3年生の方々、生徒さんに体育館に集まっていただいて、特別授業ということでやらせていただきました。まず、入りましてみんなが本当に歓迎をしてくれましてね、最初に謡曲「高砂」、各学校で歌いました。パワーポイント使ってみんなに歌詞見ていただきながら、拍手してくれた子供たちもいましたし、その後ですね、やはり高砂市の成り立ち、それと偉人であるとか、いろんな観光面とか高砂の魅力ですね、それを知ってもらいたいという思いで行かせていただきました。というのは、やはりふるさと高砂を、ここで生まれた生徒さん、もしくは他市から来られた生徒さんも当然おられるわけですけど、今、自分たちがここで育っている環境の中で、このまちのことを知ることが大変僕は大切だと思っていて、仮に大学、また就職して外へ出ていったときに、出身どこですかって聞かれて、いや、兵庫県高砂市ですよ、そこってどこのって、私もそういう経験をしてますけど、謡曲「高砂」の高砂でうたわれている地なんですよということを自信を持って言えるふるさとの思い出、またふるさとを思う気持ちを大切に持ってもらいたいということで行かせていただきました。生徒さんからも終わった後に各校校長先生がメッセージカードを私のほうへ届けていただきまして、本当にそれを見せていただいたときに、ああ、やってよかったなと思いました。市長、来てくれてありがとうだけではなく、いろんなコメントを書いていて、やはりこれは私としては継続していこうかなと思っております。やはり一番大事なのはいろんな、前段でもいろんなお話が出ましたが、確かに学力向上というのは大切なことです。ただ、やはり一人一人の思い、心の持ち方、それと友人環境も含めてですけど、やっぱりそういう心の教育っていうのが一番僕は大切かなと思っております。ふるさとって、この高砂を大切に思っていてほしい、そういう思いでこの特別授業はやらせていただこうかなと思っております。

○吉田美香教育委員

子供たち、どんな印象でした。

○都倉達殊市長

印象はですね、やっぱり授業とは全然違う内容の話の話を当然していますし、知らなかったことを教えてくれてありがとうとか、市長が来てくれたっていうのが一番にうれしかったみたいで。いや、そんな大それたことした覚えはないんですけど、必ずといっていいほど教育長さんも見に来てくれて、教育長もやっぱり後でよかったですねって言うてくれるのがうれしかったです。

○衣笠好一教育長

先生方もね、その時間市長が来られて気も遣われたり、また授業の予定があるところ、市長の時間ということで、ちょっと大変かなという意識を持っておられる先生も中にはおられました。ただ、市長に来ていただいて、子供たちにお話をさせていただいて、子供たちの感想なんか読んで、あ、やっぱり来ていただいてよかったなっていうふうな肯定的な、教師のほうもね、そんな御意見が多かったように思います。

○布施隆志教育委員

市長さん、そういうふうに中学生と触れ合われて、市長さんの目から見て高砂の子供

たち、これから将来社会人となって世の中に出て活躍することを前提として、もっとこうあってほしいなというところがあったらば、お気づきがあったらば、もっとこの辺を伸ばしてほしいなとかね、あったらちょっとその辺を意見を頂けないでしょうか。

○都倉達殊市長

やっぱり夢を持ってほしいですね。ある女子の生徒さんですけど、私たち、何したらいいのって質問があったんです。まず挨拶をしてよって僕言ったんですよ、地域の人たちとか。学校の友達関係とか。はいつて素直に分かれましたと言ってくれました。あれこれをしなさいとかじゃなくて、やはり自分たちから進んで、何かやってみようかな、先ほどボランティアの話もありましたけど、そういう気持ちの立ち位置になるということが多分大切なことだと思っています。それができてくると、次の段階にいろいろ入っていけるのかなとも思います。

○布施隆志教育委員

夢を持つというのは大事ですね、将来どういう人間になりたいだとか、何をしたいだとか、そういうのがあれば、それが原動力になってそれでやるのが道が大分開けてくると思うので、最近の若い人たちっていうのはそれがどこまで考えているかというのがやっぱり疑問に思うところで、目の前のことしか考えていない、将来の夢を語り合うようなことが大分少なくなってきたんじゃないかなという気がして、高砂の子供たちが高砂のことしか知らないということも多くて、外出たらちょっと嫌だな、不安だなとか、じゃなくてこれから世の中に飛び出すときにはいろんな世界を見ていって、いろんな経験を積んでいって、もっともっと人間大きくなって、夢が広がるような、そういうふうなことでこれからずっと過ごしていってねっていうのね、そういうふうな子供たちになってほしいなと思いますね。

○都倉達殊市長

頑張ります。

貴重な御意見いろいろありがとうございました。

それでは、本日予定しておりました議事進行につきましては終わりとさせていただきます。

閉会は事務局のほうで。

○事務局

それでは、本日の議題は全て終了いたしましたので、これをもちまして令和2年度第2回高砂市総合教育会議を閉会いたします。どうもありがとうございました。